

# 学生の確保の見通し等を記載した書類

## 目 次

1. 学生の確保の見通し及び申請者としての取組状況
  - 1) 学生の確保の見通し・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P. 2
  - 2) 学生確保に向けた具体的な取組状況・・・・・・・・・・ P. 12
2. 人材需要の動向等社会の要請
  - 1) 人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的（概要）・・・ P. 13
  - 2) 上記1) が社会的、地域的な人材需要の動向等を踏まえたものであることの客観的な根拠・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P. 14

## 1.学生の確保の見通し及び申請者としての取組状況

### 1)学生の確保の見通し

#### (1)定員充足の見込み

大学院薬学研究科薬学専攻の基盤となる、本学薬学部は、過去6年間の入学定員充足率の平均を見ると102%となっている。また、継続的に十分な受験者数を得られているため、今後も安定した入学定員充足率での推移を見込めると考える。また、近隣大学薬学部の入学者数の状況を見ると、令和2年度は岐阜県の新設薬学部の影響が見受けられるものの、4年制薬学研究科の基盤となる薬学部（6年制）の入学者数は安定して推移している。【資料1】「本学及び近隣私立大学薬学部（6年制）の入学者数等一覧」

全国の大学院薬学研究科の入学者の状況については、【資料2】日本私立学校振興・共済事業団「令和2（2020）年度 私立大学・短期大学等 入学志願動向（2）博士課程及び博士後期課程」をみると、博士課程及び博士後期課程の薬学区分の入学定員充足率は、97.95%となっており、全国的な傾向としては大学院薬学研究科への進学的需求があり、ほぼ定員を充足していることが読み取れる。

この地域の状況としては、近隣私立大学大学院薬学研究科の入学定員充足の状況について、【資料3】「近隣私立大学大学院薬学研究科（4年制）入学者数等一覧」をみると、1校を除き定員充足をして推移していることがわかる。

また、全国の薬学部（6年制）卒業生の大学院博士課程（4年制）への進学については、【資料4】一般社団法人薬学教育協議会「令和2年3月の調査結果 令和2年3月6年制学科卒業生調査結果」をみると、卒業生（女性）6,354人のうち59人が進学している。これは卒業生（女性）のうち0.9%となる。この数値を本学薬学部の入学定員150名にあてはめると、1.35名となり、割合からすると1、2名の大学院進学が見込めると考える。

また、本学薬学部の卒業後の進学状況については、【資料5】「本学薬学部卒業生の卒業後の状況について」をみると、過去6年間の大学院進学者は、6名であった。各年度の人数に違いはあるものの、大学院への進学について一定の需要があることがわかる。これまでは、本学に大学院薬学研究科が設置されていなかったため、卒業生は他大学の大学院へ進学していたが、今回在学生に行ったアンケートの結果をみると、さらに潜在的な進学希望があることが読み取れる。

今回実施した、【資料6】「金城学院大学大学院薬学研究科医療薬学専攻（博士課程）」（仮称）設置に関するニーズ調査結果報告書【薬学部薬学科所属の在学生対象】を見ると、本学薬学部薬学科在学生1～5年生の回答においては、「興味・関心を持った」「少し興味・関心を持った」という回答を合わせると、各学年平均すると40%を超えており、また、具体的な進学の希望者数については各学年2名以上の希望者があり、学年によっては11名の希望者があった。【資料7】「金城学院大学大学院薬学研究科医療薬学専攻（博士課程）」（仮称）設置に関するニーズ調査結果報告書【現職薬剤師対象】を見ると、東海三県の病院・薬局勤

務の現職薬剤師の方々からの回答においては、大学院への進学意向としては「ぜひ進学したいと思う」「機会があれば進学したいと思う」を合わせると37.9%の回答があり、本薬学研究科への入学意向としては「入学したいと思う」という回答が、12.6%（12人）あった。

なお、上記のアンケート調査を実施するにあたっては、【資料8】「金城学院大学大学院「薬学研究科医療薬学専攻（博士課程）」（仮）の設置計画の概要」を示して行った。当該アンケート調査実施時点では、薬学研究科医療薬学専攻という名称での申請を予定していたが、その後の検討の過程で、教育研究の内容と専攻名称が適切に一致するように、専攻名称を薬学研究科薬学専攻に改めた。専攻名称の変更に伴い、設置計画の概要を改め、再度アンケート調査を実施した。

【資料9】「金城学院大学大学院薬学研究科薬学専攻（博士課程）」（仮称）設置に関するニーズ調査結果報告書【薬学部薬学科所属の在学生対象】を見ると、本学薬学部薬学科在学生1～6年生の回答においては、「とても興味・関心を持った」「少し興味・関心を持った」という回答を合わせると、各学年平均すると40%を超えており、また、具体的な進学の希望者数については「大学卒業後すぐに進学したいと思う」という回答が、6年生を除き、各学年2名以上あり、学年によっては8名あった。また、「実務経験を積んだ後に進学したいと思う。」という回答が、各学年平均すると13名あった。

【資料10】「金城学院大学大学院薬学研究科薬学専攻（博士課程）」（仮称）設置に関するニーズ調査結果報告書【現職薬剤師対象】をみると、調査実施施設154施設（462人想定）のうち、勤務する21名の現職薬剤師の方々から回答があった。本薬学研究科への受験意向としては「受験したいと思う」という回答が14.3%（3名）あり、本薬学研究科への進学意向としては「入学したいと思う」という回答が、14.3%（3名）あった。また、入学希望時期については、「2022年4月の入学を希望する」という回答が14.3%（3名）あった。

本大学院薬学研究科の定員を設定する上で、薬学系研究科（4年制、博士課程）を持つ近隣私立3大学の入学定員（愛知学院大学大学院：3名、鈴鹿医療科学大学大学院：2名、名城大学大学院：4名）についても参考にした。各大学薬学部の入学定員に対する、各大学院薬学研究科の定員の比率をみると、それぞれ、2.1%、2.0%、1.5%となっている。【資料3】「近隣私立大学大学院薬学研究科（4年制）入学者数等一覧」

また、本研究科は、大学院設置基準第8条第3項に基づき、本学既設の薬学部専任教員が兼任で指導を行う。このことを考慮し、学部の教育・研究に支障が生じないように、同時に研究科で十分な研究指導体制を整えるために、適切な規模とすることが必要と考える。

上述の各要素を総合的に考慮し、本研究科の入学定員を2名（本学薬学部入学定員150名に対する比率は1.3%）と設定した。この数値は近隣私立大学大学院薬学研究科よりも低く、本学薬学部の定員充足状況、在学生からの進学希望需要、薬剤師として働く方々の進学希望需要などから、安定して定員充足の見込みがあると考えられる。

## (2) 定員充足の根拠となる客観的なデータの概要

### 【資料1】「本学及び近隣私立大学薬学部（6年制）入学者数等一覧」

本学及び東海三県に所在する私立大学薬学部（6年制）の入学定員、過去6年間の入学者数、定員充足率、定員充足率の平均値をまとめた。本学、愛知学院大学、鈴鹿医療科学大学、名城大学については、6年間の定員充足率は100%を超えている。この数値は、この地域の薬学部の安定した定員充足状況を示している。令和2年度については、岐阜医療科学大学薬学部の新設があり、分布の変化がみられるが、本学の要因としては学部の設置申請に伴う定員超過の抑制の影響によるものと考えられる。これまでのところ、十分な受験者数があるため、今後も安定した定員充足が見込めると考える。

### 【資料2】日本私立学校振興・共済事業団「令和2（2020）年度 私立大学・短期大学等入学志願動向（2）博士課程及び博士後期課程」

日本私立学校振興・共済事業団が、令和2（2020）年度に実施した「学校法人基礎調査」から、入学定員、志願者数及び入学者数等を集計し、入学定員充足率や志願倍率等の動向を規模別、地域別、学部系統別にまとめたもの。博士課程及び博士後期課程の薬学区分については入学定員257名に対して入学者239名で、入学定員充足率は97.95%となっている。また、前年度に比べ0.44%の増となっている。

### 【資料3】「近隣私立大学大学院薬学研究科（4年制）入学者数等一覧」

愛知学院大学、鈴鹿医療科学大学及び名城大学の薬学研究科（4年制）の入学者数、定員充足率等についてまとめた。年度ごとに定員充足率に違いがあるものの、一定の需要が継続的にあることが分かる。また、自大学薬学部の入学定員に対する自大学院薬学研究科の入学定員の比率についても示した。愛知学院大学2.1%、鈴鹿医療科学大学2%、名城大学1.5%となっている。

### 【資料4】一般社団法人薬学教育協議会「令和2年3月の調査結果 令和2年3月6年制学科卒業生調査結果」

第1表令和2年3月6年制学科卒業生調査結果をみると、女性の総卒業生数6,354名のうち進学した者が59名で、全体の0.9%となっている。男性と女性を合わせた場合は、全体の1.6%であるが、本学は女子大学であるため、女性の卒業生の数値を参考とする。仮に、本学の薬学部入学定員150名に対してこの割合で算出すると、1.35名程度となる。

### 【資料5】「本学薬学部卒業生の卒業後の状況について」

平成26年度から令和元年度までの本学薬学部卒業生の卒業後の進路についてまとめた。この6年間に大学院へ進学した者は、平成27年度に2名、平成28年度に1名、平成30年度に3名となっている。各年度の人数に違いはあるものの、大学院への進学について一定の

需要があることがわかる。

【資料6】「金城学院大学大学院薬学研究科医療薬学専攻（博士課程）」（仮称）設置に関するニーズ調査結果報告書【薬学部薬学科所属の在学生対象】、【資料7】「金城学院大学大学院薬学研究科医療薬学専攻（博士課程）」（仮称）設置に関するニーズ調査結果報告書【現職薬剤師対象】

外部機関によるアンケート調査を令和4（2022）年度の大学院進学対象となる本学薬学部5年生を含め、薬学部1年生から5年生及び、東海三県の病院・薬局勤務の現職薬剤師の方を対象に行い、本学薬学研究科薬学専攻に対する関心度などについて、定員充足のための「入口」調査を行った。

なお、アンケート実施時は、名称を「薬学研究科 医療 薬学専攻（博士課程）」としていたが、検討の過程で、「薬学研究科薬学専攻（博士課程）」に変更することとした。専攻の名称と、具体的な設置の内容が適切に一致するように専攻名称を改めた。この変更によって、アンケート時に示した設置計画の概要【資料8】の内容に名称以外の変更はないため、アンケート結果に及ぼす影響は少ないと考える。

【資料6】「金城学院大学大学院 薬学研究科 医療薬学専攻（博士課程）」（仮称）設置に関するニーズ調査 薬学部薬学科所属の在学生対象 結果概要

調査対象		金城学院大学 薬学部薬学科に所属する在学生 (1年生～5年生)
調査 対象数	学生数	752人
	回収数	603人
	回収率	80.2%
調査時期		令和3年1月27日（水）～令和3年2月3日（水）
調査実施機関		株式会社 進研アド

回収数内訳：1年生135人、2年生132人、3年生139人、4年生123人、  
5年生74人

本学薬学研究科薬学専攻への進学意向

5年生：140人に配布し74人から回答を得た。本学薬学研究科に対して「興味・関心を持った」または「少し興味・関心を持った」と回答したのは全体の37.8%であり、2.7%（2人）の学生が「進学したいと思う」と回答しており、入学定員（2名）と同数の進学意向が得られた。

4年生：158人に配布し123人から回答を得た。本学薬学研究科に対して「興味・関心を持った」または「少し興味・関心を持った」と回答したのは全体の52.8%であり、3.3%（4人）の学生が「進学したいと思う」と回答しており、入学定員（2名）の2倍の進学意向が得られた。

3年生：156人に配布し139人から回答を得た。本学薬学研究科に対して「興味・関心を持った」または「少し興味・関心を持った」と回答したのは全体の51.8%であり、7.2%（10人）の学生が「進学したいと思う」と回答しており、入学定員（2名）を大きく上回る進学意向が得られた。

2年生：154人に配布し132人から回答を得た。本学薬学研究科に対して「興味・関心を持った」または「少し興味・関心を持った」と回答したのは全体の47.7%であり、1.5%（2人）の学生が「進学したいと思う」と回答しており、入学定員（2名）と同数の進学意向が得られた。

1年生：144人に配布し135人から回答を得た。本学薬学研究科に対して「興味・関心を持った」または「少し興味・関心を持った」と回答したのは全体の62.2%であり、8.1%（11人）の学生が「進学したいと思う」と回答しており、入学定員（2名）を大きく上回る進学意向が得られた。

【資料7】「金城学院大学大学院 薬学研究科 医療薬学専攻（博士課程）」（仮称）設置に関するニーズ調査 現職薬剤師対象 結果概要

調査対象		病院・薬局勤務の現職薬剤師
調査エリア		愛知県、岐阜県、三重県
調査方法		郵送調査
調査対象数	依頼数	1,629人
	回収数	95人
	回収率	有効回収率：5.8%
調査時期		令和3年1月6日（水）～令和3年1月26日（火）
調査実施機関		株式会社 進研アド

回答者の性別 男性0%、女性100%

回答者の年齢 20代28.4%、30代28.4%、40代26.3%、50代12.6%、60代以上4.2%

回答者の勤務先 病院98.9% 薬局1.1%

回答者の保有資格 薬剤師100%

回答者の薬剤師の実務経験年数 1年未満 2.1%、1年～5年未満 28.4%、  
5年～10年未満 17.9%、10年～15年未満 9.5%、15年～20年未満 8.4%  
20年～30年未満 18.9%、30年以上 10.5%

・大学院への進学意向について

大学院へ「ぜひ進学したいと思う」、「機会があれば進学したいと思う」を合わせると 95名中 36名（37.9%）の回答があった。

・特色に対する魅力度について

本研究科薬学専攻の特色に対する魅力度の設問においては、「とても魅力を感じる」、「ある程度魅力を感じる」を合わせると、63名（66.3%）の回答があった。

・受験意向について

本研究科薬学専攻を「受験してみたいと思う」という回答が、95名中 15名（15.8%）からあった。

・入学意向について

本研究科薬学専攻の受験意向を持つと回答した 15名のうち、12名から「入学したいと思う」という回答が得られた。この数値は、入学定員 2名を大きく上回っている。

・入学希望時期について

本研究科薬学専攻に入学意向を持つと回答した 12名のうち、5名が令和 4年 4月の入学を希望すると回答し、7名が令和 6年 4月以降の入学を希望すると回答した。開設予定年度の入学を希望するという需要と、少し先の計画として大学院への進学を考えているという需要があるという結果が出ている。

本調査の結果から、本学薬学部 1年生から 5年生のどの学年においても本研究科薬学専攻入学定員と同数以上の進学意向があり、また、東海三県の病院・薬局勤務の現職薬剤師の方へのニーズ調査結果からも、大学院への進学及び本研究科への進学の意向が見て取れるので、本研究科薬学専攻の入学定員が問題なく充足できる見込みを示唆している。

【資料 8】「金城学院大学大学院「薬学研究科医療薬学専攻（博士課程）」（仮）の設置計画の概要」

当初のアンケート調査実施時に示した、設置計画の概要。

【資料 9】「金城学院大学大学院薬学研究科薬学専攻（博士課程）」（仮称）設置に関するニーズ調査結果報告書【薬学部薬学科所属の在学生対象】、【資料 10】「金城学院大学大学院薬学研究科薬学専攻（博士課程）」（仮称）設置に関するニーズ調査結果報告書【現職薬剤師対象】

外部機関によるアンケート調査を令和 4（2022）年度の大学院進学対象となる本学薬学部 6 年生を含め、薬学部 1 年生から 6 年生及び、愛知県・三重県の医療施設の現職薬剤師の方を対象に行い、本学薬学研究科薬学専攻に対する関心度などについて、定員充足のための「入口」調査を行った。

【資料 9】「金城学院大学大学院薬学研究科薬学専攻（博士課程）」（仮称）設置に関するニーズ調査 薬学部薬学科所属の学生対象 結果概要

調査対象		金城学院大学 薬学部薬学科に所属する在学生 (1 年生～6 年生)
調査 対象数	学生数	858 人
	回収数	754 人
	回収率	87.9%
調査時期		令和 3 年 6 月 7 日（月）～令和 3 年 6 月 9 日（水）
調査実施機関		株式会社 進研アド

回収数内訳：1 年生 111 人、2 年生 128 人、3 年生 144 人、4 年生 147 人、5 年生 107 人、6 年生 117 人

本学薬学研究科薬学専攻への進学意向

6 年生：139 人に配布し 117 人から回答を得た。本学薬学研究科に対して「とても興味・関心を持った」または「少し興味・関心を持った」と回答したのは全体の 40.2%であり、0 人の学生が「大学卒業後すぐに進学したいと思う」、12 人の学生が「実務経験を積んだ後に進学したいと思う」と回答した。大半の学生が就職先等が決まった時期の調査であったため、このような結果が出たものと考えられるが、実務経験を積んだ後に進学したいと思うという回答は 12 人あり、中長期的には進学の希望があるという結果が得られた。

5 年生：154 人に配布し 107 人から回答を得た。本学薬学研究科に対して「とても興味・関心を持った」または「少し興味・関心を持った」と回答したのは全体の 49.5%であり、4 人の学生が「大学卒業後すぐに進学したいと思う」、6 人の学生が「実務経験を積んだ後に進学したいと思う」と回答した。入学定員（2 名）を超える進学意向が得られた。

4年生：153人に配布し147人から回答を得た。本学薬学研究科に対して「とても興味・関心を持った」または「少し興味・関心を持った」と回答したのは全体の39.5%であり、3人の学生が「大学卒業後すぐに進学したいと思う」、14人の学生が「実務経験を積んだ後に進学したいと思う」と回答した。入学定員（2名）を超える進学意向が得られた。

3年生：151人に配布し144人から回答を得た。本学薬学研究科に対して「とても興味・関心を持った」または「少し興味・関心を持った」と回答したのは全体の43.1%であり、4人の学生が「大学卒業後すぐに進学したいと思う」、11人の学生が「実務経験を積んだ後に進学したいと思う」と回答した。入学定員（2名）を超える進学意向が得られた。

2年生：147人に配布し128人から回答を得た。本学薬学研究科に対して「とても興味・関心を持った」または「少し興味・関心を持った」と回答したのは全体の42.2%であり、4人の学生が「大学卒業後すぐに進学したいと思う」、12人の学生が「実務経験を積んだ後に進学したいと思う」と回答した。入学定員（2名）を超える進学意向が得られた。

1年生：114人に配布し111人から回答を得た。本学薬学研究科に対して「とても興味・関心を持った」または「少し興味・関心を持った」と回答したのは全体の78.4%であり、8人の学生が「大学卒業後すぐに進学したいと思う」、23人の学生が「実務経験を積んだ後に進学したいと思う」と回答した。入学定員（2名）を超える進学意向が得られた。

【資料10】「金城学院大学大学院薬学研究科薬学専攻（博士課程）」（仮称）設置に関するニーズ調査 現職薬剤師対象 結果概要

調査対象		医療施設の現職薬剤師
調査エリア		愛知県、三重県
調査方法		郵送調査
調査対象数	依頼数	462人想定（154施設）
	回収数	21人
	回収率	回収率：4.5%
調査時期		令和3年6月7日（月）～令和3年6月14日（月）
調査実施機関		株式会社 進研アド

回答者の性別 男性0%、女性100%

回答者の年齢 20代47.6%、30代33.3%、40代14.3%、60代以上4.8%

回答者の保有資格 薬剤師100%

回答者の薬剤師の実務経験年数 1年未満14.3%、1年～5年未満28.6%、

5年～10年未満 33.3%、10～15年未満 4.8%、20年～30年未満 14.3%、30年以上 4.8%

- ・「学びなおし」への関心の有無  
「関心がある」という回答が、10名（47.6%）
- ・特色に対する魅力度について  
本研究科薬学専攻の特色に対する魅力度の設問においては、「とても魅力を感じる」、「ある程度魅力を感じる」を合わせると、15名（71.4%）の回答があった。
- ・受験意向について  
本研究科薬学専攻を「受験したいと思う」という回答が、21名中3名（14.3%）からあった。
- ・入学意向について  
本研究科薬学専攻の入学意向を持つと回答した3名のうち、3名から「入学したいと思う」という回答が得られた。この数値は、入学定員2名を上回っている。
- ・入学希望時期について  
本研究科薬学専攻に入学意向を持つと回答した3名のうち、3名が令和4年4月の入学を希望すると回答した。開設予定年度の入学を希望するという需要があるという結果が出ている。

再度実施したアンケート調査の結果から、本学薬学部1年生から6年生のどの学年においても本研究科薬学専攻への関心は高くまた、愛知県・三重県の医療施設の現職薬剤師の方へのニーズ調査結果からも、関心の高さが見て取れる。進学意向についても、入学定員と同数以上の進学意向があり、本研究科薬学専攻の入学定員が問題なく充足できる見込みを示唆している。

### (3) 学生納付金の設定の考え方

本研究科の初年度学生納付金は下表の通り設定した。

入学金	授業料	施設設備費	諸費用	合計
200,000 円	850,000 円	50,000 円	13,370 円	1,113,370 円

学生納付金は本学既設の学部・研究科の設定金額及び、近隣の私立大学大学院薬学研究科の学費を参考に、入学金は 200,000 円、授業料は半期 425,000 円（年間 850,000 円）、施設設備費は半期 25,000 円（年間 50,000 円）、諸費用は学生傷害保険料など合計で 13,370 円と設定した。

【資料 11】「近隣私立大学大学院薬学研究科の学費一覧」

## 2) 学生確保に向けた具体的な取組状況

薬学研究科薬学専攻の新設にあたり、本研究科のホームページを新たに開設し、大学院入学案内やその他印刷物、オープンキャンパスなどで広く周知を図る。また、学生確保の中心となる本学の薬学部学生に対しては、薬学部大学院進学相談窓口（仮称）を設置し、本学研究科に対する理解を深め、進学意向を高める予定である。

### (1) 薬学研究科薬学専攻ホームページの開設

本研究科のホームページを新たに開設し、本研究科の概要、特色、学びのポイント、修了要件などを掲載し、広く社会に情報発信を行う。修了生を輩出したら、「先輩の声」として学生目線の紹介も掲載を予定している。これにより本研究科の認知度をあげる。

### (2) 大学院入学案内などの印刷物の作成

大学院入学案内を作成し、本研究科の趣旨及び目的、概要、授業科目一覧、科目内容の紹介などを掲載する予定である。本研究科を進学先として検討している学生や受験意向者が、本研究科への理解を深める媒体として期待ができる。また、学生確保の中心となる既設薬学部の在学生に対しては、薬学研究科志望者のためのリーフレットを作成し、応募資格や選考方法などを紹介する予定である。これにより学生が在学中から本学研究科進学意向を高め、具体的に進路について明確な目標を持つことができるようになることを期待している。

また、すでに医療機関等で薬剤師として働く方に対しても、郵送で入学案内リーフレットを送付するなどして周知をはかる。特に本学薬学部OGについては、本研究科への進学意向が潜在的に多くあると思われるので、同窓会を活用して周知していく。

### (3) 大学院進学相談窓口（仮称）

薬学部教員が窓口となる大学院進路相談窓口を本学既設の薬学部にて設け、本学研究科への進学を目指す学生に個別で本学研究科の紹介を行い、進学をサポートする予定である。進学意向アンケートでもわかるように、1年生から進学意向を持つ学生も見受けられる。早期からサポートし、学生の高いモチベーションを保つことで、学生確保の要となることを期待している。

### (4) オープンキャンパス

オープンキャンパスを年に3回（7月、8月、10月）実施する。7月・8月のオープンキャンパスでは、大学院専用の個別相談コーナーを設け、本研究科の教員が本研究科の紹介・説明、進学意向者の質問に対して対応する予定である。10月のオープンキャンパスにおいても相談コーナーを設け、入試スタッフが質問や相談に応じる予定である。これにより、普段直接相談する機会が少ない学外進学意向者に対し、本研究科への理解を深める機会を設けることができ、進学意向を高めるとともにイメージとの不一致も防ぐことができると考えている。

## 2.人材需要の動向等社会の要請

### 1) 人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的 (概要)

日本が直面する超高齢化において、有病者への治療のみでなく、健康寿命を延伸するための予防医療への対応が求められることとなった。また、病院では特定機能病院と地域医療支援病院、薬局では地域連携薬局と専門医療機関連携薬局と、薬剤師に課せられた役割は機関ごとに明確化され、それぞれに対して柔軟かつ専門的な対応が求められるようになった。創薬研究のアプローチに関しては、スクリーニング創薬からゲノム創薬へと推移し、化学物質を出発点として創薬を行っていた従来の手法から、タンパク質工学の進展を背景として抗体医薬を代表とするタンパク質医薬の台頭、さらには核酸医薬、細胞治療・再生医療へとゲノム創薬の時代に即した創薬モダリティが加速的に拡大してきている。さらに、近年では臨床薬学研究が注目され、臨床薬学と基礎薬学の研究融合が求められるようになった。また、薬を受け取る生体側の情報に立脚した投薬（オーダーメイド医療）は、患者の負担を低減する適正な医療を提供するのみならず、無駄な医療費の削減を可能とし、社会への貢献につながる事が指摘されている。このような背景のもと、創造性や独創性を十分に兼ね揃え、薬学領域において高度かつ専門的な技術及び学識を深め、これに基づいて様々な問題に対して臨機応変かつ柔軟に対応できる薬学研究者・薬剤師の養成が求められている。

治療医薬、予防医薬、健康増進などさまざまなニーズが求められる現代医療において、倫理性はもとより高度な専門性や研究遂行能力を駆使して問題を解決する力を身につけるため、薬学領域に関する高度な専門知識を主体的に蓄積し理解を深めることは非常に重要である。また、これら専門知識と医療との関わりについて考察し、論点を整理して課題を設定できる能力も必須となる。さらに、設定した課題に対して最先端かつ高度な薬学的知識を駆使して問題解決の達成に向けて取り組み、解決し、世界に成果を発信する力を養成することが必要となる。薬学研究に貢献できる研究者としては、研究倫理を備え研究活動の社会に対する信頼性の担保を目指すことが求められる。また、薬学研究に貢献できる医療従事者としては、倫理観を備え医療の現場での課題や既存治療に対する改善策を抽出して問題を解決することで、医療の発展と良質な医療の提供に寄与することが求められる。本研究科では、このような人材を育成するため、高度な専門知識を基に創薬や医療などの研究現場において論点を整理して課題を設定できる能力、及び高い倫理性を担保した上で薬学研究を遂行し問題解決の達成に向けて取り組み解決する能力を修得させることを目的とする。

本研究科は、高い倫理観、及び薬学領域に関する高度な専門知識と研究能力を通じて課題を設定し問題を解決する能力を有し、薬学研究に貢献できる研究者・医療従事者を養成する。

本研究科修了後の具体的進路は、学術界における薬学研究者（薬学の専門家・教育者として後進を指導し社会に貢献）、産業界における薬学研究者（創薬、食品、化粧品研究等を通して社会に貢献）、公務員（国立研究機関、公設試験研究機関での研究等を通して社会に貢

献)、医療機関における薬学研究者(臨床試験や調査研究などの臨床研究を通して医療の発展に貢献)、医療機関で高度な専門性を発揮できる医療従事者(医薬品の適正使用にむけた患者情報や医薬品情報の収集・評価・加工・提供・管理担当者、専門医療機関連携薬局担当者として医療に貢献)などが想定される。

## 2) 上記1) が社会的、地域的な人材需要の動向等を踏まえたものであることの客観的な根拠

【資料 12】日本学術会議薬学委員会医療系薬学分科会による「社会に貢献する医療系薬学研究の推進」報告書(平成 29 年 9 月 29 日)の人材育成の項目において、高齢社会の我が国における医療系薬学研究者に求められていることは、チーム医療、医薬品の開発、医薬品適正使用、地域包括ケアシステムの推進などの発展を通して国民の福祉向上に貢献することとの指摘がなされている。また、医療系薬学研究は基礎から応用・臨床に至る研究領域に広く及んでおり、その活躍の場は大学や公的な研究機関にとどまらず、医療施設、薬局、医薬品産業などに広がっていることが指摘されている。そして、高度人材育成の場である大学院においては、社会人学び直しや臨床マインドと研究マインドをバランスよく備えた pharmacist-scientists の育成への対応の重要性が述べられている。

また、【資料 13】日本学術会議薬学委員会薬剤師職能とキャリアパス分科会による「提言 持続可能な医療を担う薬剤師の職能と生涯研鑽」(令和 2 年 9 月 4 日)の、薬剤師の将来需給予測の項目においては、今後 25 年間の薬剤師の需給予測については、長期的にみると薬剤師の供給が需要を上回る予測が述べられている。しかし、この推計については、薬局や医療機関における薬剤師の業務が現在のものと変わらない前提で行われたものであり、今後、セルフメディケーションの推進に代表される病気の予防や健康寿命の延伸に向けた取り組みなどの業務が拡大した場合には、薬剤師の需要が高まる可能性についても指摘されている。人材需要としては、現状として、pharmacist-scientists が不足していることや、医薬品・医療機器等の品質保証や製造の管理、食品・環境の衛生確保に関しては、薬剤師特有の職能が必要ではあるが、十分に供給されていないこと、薬系大学および大学病院薬剤部などにおいて教育研究を担う指導者が不足していることが、今後の課題として指摘されている。

また、卒後研修制度のあり方の項目においては、超高齢社会において、社会が求める持続可能な医療を担う薬剤師は、薬剤師免許取得後の生涯研鑽によって培われることも指摘されている。初期研修としての薬剤師レジデント制度、その後の認定・専門薬剤師制度、大学院博士課程等によって研鑽を続けることにより、質の高い薬物治療の提供と国民の健康増進に寄与することが期待されると述べられている。

【資料4】「一般社団法人薬学教育協議会の令和2年度就職動向調査集計結果」の第2表及び第13表をもとに作成した【資料14】「国公立薬系大学院博士課程修了者動向（6年制学科卒）と6年制学科卒業生就職状況の比較」を見ると、博士課程修了者の就職動向としては、試験・研究機関・大学が32.85%と最も高く、次いで医薬品関連企業（研究開発）21.17%、病院薬剤部（薬剤科）16.06%となっている。6年制学科卒業生においては、上位から保険薬局46.45%、病院薬剤部（薬剤科）19.73%、医薬品関連企業（研究開発）4.45%となっている。博士課程修了生の進路としては、試験・研究機関・大学、医薬品関連企業（研究開発）を合わせて54.02%となっており、6年制学科卒業生は保険薬局と病院薬剤部（薬剤科）を合わせて66.18%となっている。このことから、博士課程修了者と6年制学科卒業生に、社会から求められている人材需要は大きく異なることがわかる。

大学院薬学研究科修了者に対する人材需要等を検証するため、外部機関によるニーズ調査を、本学の卒業生が最も就職している東海三県において、医療施設の採用担当者を対象に行い、本学薬学研究科薬学専攻に対する関心度などについて、「出口」調査を行った。

なお、アンケート実施時は、名称を「薬学研究科 医療 薬学専攻（博士課程）」としていたが、検討の過程で、「薬学研究科薬学専攻（博士課程）」に変更することとした。専攻の名称と、具体的な設置の内容が適切に一致するように専攻名称を改めた。この変更によって、アンケート時に示した設置計画の概要の内容【資料8】に名称以外の変更はないため、アンケート結果に及ぼす影響は少ないと考える。

【資料15】「金城学院大学大学院 薬学研究科 医療薬学専攻（博士課程）」（仮称）設置に関するニーズ調査 医療施設対象 結果概要

調査対象		医療施設の採用担当者
調査エリア		愛知県、岐阜県、三重県
調査方法		郵送調査
調査対象数	依頼数 (依頼施設数)	950 施設
	有効回収数 (回収施設数)	172 施設 有効回収率：18.1%
調査時期		令和3年1月6日（水）～令和3年1月26日（火）
調査実施機関		株式会社 進研アド

回答者の人事採用への関与度：採用の決裁権があり、選考にかかわっている 54.1%、  
採用の決裁権はないが、選考にかかわっている 30.2%  
回答施設の本社所在地：愛知県 80.8% 岐阜県 10.5% 三重県 8.1%

回答施設の業種：病院 52.9%、 診療所・クリニック 44.8%、 その他 2.3%

回答施設の従業員数：50名未満 45.3%、 50名～100名未満 7.6%、  
100名～500名未満 32.6%、500名～1000名未満 7.6%  
1,000名～5,000名未満 6.4%、5000名以上 0.6%

・回答施設の採用状況（過去3か年）/令和2年度の採用予定数

回答施設の平均的な正規職員・社員の採用人数は、「1名～5名未満」が36.6%で最も多く、次いで「10名～20名未満」で12.8%、「5名～10名未満」が12.2%であり、毎年正規職員・社員を採用している施設がほとんどであった。

回答施設の令和2年度の採用予定数は、「昨年度並み」が46.5%で最も多く、次いで「未定」が30.8%、「増やす」が14.5%であった。採用予定数が「未定」という施設も一定数見られるものの、回答施設の多くは昨年と同等かそれ以上の採用が予定されている様子であった。

・薬剤師の勤務者数・採用希望人数

薬剤師の現在の勤務者数は、「0名」が37.8%で最も多く、次いで「1名～5名未満」が27.9%、「5名～10名未満」が11.6%であり、総数は1,132人で平均7.1人であった。

薬剤師の今後5年間の採用希望人数は、「0名」が49.4%で最も多く、次いで「1名～5名未満」22.1%、「5名～10名未満」が5.2%であった。総数は373人で、平均2.6人であった。

・本学「薬学研究科医療薬学専攻（博士課程）」の特色に対する魅力度

体系的に区分した教育課程 83.1%

※魅力度＝「とても魅力を感じる」「ある程度魅力を感じる」と回答した人の合計値

・本学「薬学研究科医療薬学専攻（博士課程）」の社会的必要性

本学薬学研究科医療薬学専攻（博士課程）の社会的必要性については、81.4%（140施設）が「必要だと思う」と回答しており、多くの施設からこれからの社会にとって必要な研究科であると評価されていることがうかがえる。

・本学「薬学研究科医療薬学専攻（博士課程）」修了生に対する採用意向・毎年の採用想定人数

本学薬学研究科医療薬学専攻（博士課程）の修了生を「採用したいと思う」と回答した施設は、43.0%（74施設）であった。

本学薬学研究科薬学専攻（博士課程）の修了生を「採用したいと思う」と回答した74施

設に対して行った「本学修了生の毎年の採用想定人数」では、合計で74名という結果を得られた。入学定員を大きく上回る採用想定数の回答があり、このことから安定した人材需要があることがうかがえる。

採用意向・採用想定人数について、詳細は以下のとおりである。

業種別では、「病院」からの採用意向は68.1%（91施設中、62施設）と非常に高く、採用想定人数は67名であった。「診療所・クリニック」の採用意向は11.7%（77施設中、9施設）であり、採用想定人数は6名あり、いずれも入学定員を上回っている。

この結果から、本学の卒業生が目指す活躍のフィールドとして想定している機関・施設から評価を得ていることがうかがえる。

本調査結果から、東海3県内において74名と入学定員2名を大きく上回る採用意向があり、本学薬学研究科薬学専攻修了生に対する採用意向や需要が高いものと見通している。

なお、上記のアンケート調査【資料15】を実施するにあたっては、【資料8】「金城学院大学大学院「薬学研究科医療薬学専攻（博士課程）」（仮）の設置計画の概要」を示して行った。当該アンケート調査実施時点では、薬学研究科医療薬学専攻という名称での申請を予定していたが、その後の検討の過程で、教育研究の内容と専攻名称が適切に一致するように、専攻名称を薬学研究科薬学専攻に改めた。専攻名称の変更に伴い、設置計画の概要を改め、再度アンケート調査【資料16】を実施した。

【資料16】「金城学院大学大学院薬学研究科薬学専攻（博士課程）」（仮称）設置に関するニーズ調査 医療施設対象 結果概要

調査対象		医療施設の採用担当者
調査エリア		愛知県、三重県
調査方法		郵送調査
調査対象数	依頼数 (依頼施設数)	154施設
	回収数 回収率	10施設 回収率：6.5%
調査時期		令和3年6月7日（月）～令和3年6月13日（日）
調査実施機関		株式会社 進研アド

回答者の人事採用への関与度：採用の決裁権があり、選考にかかわっている 40%、

採用の決裁権はないが、選考にかかわっている 40%  
採用時には直接かかわらず、情報や意見を収集・提供する  
立場にある 20%

回答施設の所在地：愛知県 70% 三重県 30%

回答施設の従業員数：50名～100名未満 10%、100名～500名未満 40%、  
500名～1000名未満 20%、1,000名～5,000名未満 30%

・回答施設の採用状況（過去3か年）/令和3年度の採用予定数

回答施設の平均的な正規職員・社員の採用人数は、「10名～20名未満」が30%、次いで「1名～5名未満」「50名～100名未満」が20%であり、毎年正規職員・社員を採用している施設がほとんどであった。

回答施設の令和3年度の採用予定数は、「昨年度並み」が60%で最も多く、次いで「増やす」「減らす」が同率で10%であった。採用予定数が「未定」という施設も一定数見られるものの、回答施設の多くは昨年と同等程度の採用が予定されている様子であった。

・薬剤師の勤務者数・採用希望人数

薬剤師の現在の勤務者数は、「1名～5名未満」が30%で最も多く、「10名～20名未満」「30名～50名未満」が同率で20%であり、総数は201人で平均20.1人であった。

薬剤師の今後5年間の採用希望人数は、「1名～5名未満」40%、次いで「10名～20名未満」が20%であった。総数は49人で、平均6.1人であった。

・本学「薬学研究科薬学専攻（博士課程）」の特色に対する魅力度

体系的に区分した教育課程 80%

※魅力度＝「とても魅力を感じる」「ある程度魅力を感じる」と回答した人の合計値

・本学「薬学研究科薬学専攻（博士課程）」の社会的必要性

本学薬学研究科薬学専攻（博士課程）の社会的必要性については、70%（7施設）が「必要だと思う」と回答しており、社会にとって必要な研究科であると評価されていることがうかがえる。

・本学「薬学研究科薬学専攻（博士課程）」修了生に対する採用意向・毎年の採用想定人数

本学薬学研究科薬学専攻（博士課程）の修了生を「採用したいと思う」と回答した施設は、70%（7施設）であった。

本学薬学研究科薬学専攻（博士課程）の修了生を「採用したいと思う」と回答した7施設に対して行った「本学修了生の毎年の採用想定人数」では、合計で7名という結果を得られ

た。入学定員を上回る採用想定数の回答があり、このことから安定した人材需要があることがうかがえる。

本調査結果から、本学薬学研究科薬学専攻修了生に対する採用意向や需要が高いものと見通している。

これらのことから、本学では令和4（2022）年4月に既存の6年制の薬学部を母体とする4年制博士課程である薬学研究科薬学専攻を設置することとした。